

秋思

張

籍

洛陽城裏秋風らくようじょうりしゅうふうを見るみ

家書かじよ作つくんと欲ほつして意い万重ばんちゆう

復恐またおそる匆匆そうそう説ときき尽つくくくささぎぎるるを

行人こうじん発はつするに臨のぞんで又また封ふうをを開ひらく

【作者】

張籍（七六八〜八三〇年）中唐の詩人。字は文昌。和州（かしゅう）烏江（安徽省和県）の人。師友の韓愈（かんにん）に目をかけられ、その推薦によって、国子博士となった。樂府に長じている。

【語釈】

*秋思：秋の頃の物思い。秋に感じるものさびしい思い。 *洛陽城：（唐代で長安に次ぎ東の首都）・洛陽の街 *裏：内に。 *家書：故郷への便り。 *萬重：幾重にも重なる。 *復恐：ひよとしたら…なのかも

しれないと心配する。 *復：また。ふたたび。 *匆匆：慌ただしいさま。いそがしいさま。騒がしいさま。

*行人：旅人。ここでは、手紙を托す人のことになる。

【通釈】

洛陽城の裏（うち）に秋風（あきかぜ）を見た。家に出す手紙を書こうと思つて、意（おもい）が幾重（いくえ）にも重なつてくる。あわただしく書いたので、言い尽くしていないのではなかつたかと心配になつて（手紙を託する）行人（たびびと）が発する際に、もう一度封（ふう）を開いて見直したことである